

名古屋の古道・街道

池田 誠一

【2】東海道…笠寺から七里の渡しへ

1 政治の道

戦国時代が終わり、新しい体制に切り替わるとともに、まず手がけられたのは軍事や統治のための、いわば政治のための道づくりでした。政治の道は、為政者が整備し管理する道です。

幕府が管理した道としては東海道を始めとする、後に五街道とされた道路で、徳川幕府の統治の根幹となる道でした。また各藩でも、統治や交易のために街道を整備していきました。

江戸時代300年近くの間には、政治ばかりではなく経済や文化を支える様々な道が出来ましたが、それらの中でも最も早く国土の幹線として整備され、この地域にも大きな影響をもたらしたのが東海道です。

2 国土の最重要幹線…東海道

(1) 徳川幕府の交通政策

1600年、関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康がまず着手したのが、江戸から京への街道づくりです。そしてまだ幕府の出来ていない1601年には早くも江戸から京までの宿駅を定め、ここに近世の東海道がスタートしました。

1604年には、江戸日本橋を起点にした1里塚を設けるとともに、道の両側には松並木を植え

させるなど街道づくりを進めました。そして大坂夏・冬の陣を経て、1635年の参勤交代制の開始とともに、街道は幕政の中でも大変重要な役割を担うようになったのです。

*

江戸時代に国の骨格となった道路には、先ほど触れたように、東海道の他に、中山道、奥州道中、日光道中、甲府道中のいわゆる五街道がありました。(表1)また、五街道の付属として、美濃路、佐屋路などの街道も幕府の管理する道となり、道中奉行の支配下におかれました。

今日の道路行政は道路の建設や管理が中心になっていますが、この時代は輸送することに重点があり、古くから使われていた伝馬制を拡大して制度化されました。この制度は簡単に言えば、独占的な宿駅を定め、そこに伝馬をおき、公用の人や物などを次の宿場まで輸送(継立)する一方で、伝馬の負担の代替として一定の年貢等を減免するというものです。

街道名	区 間	付属街道
東 海 道	江戸・京都	美濃路、佐屋路等
中 山 道	江戸・草津	
日光道中	江戸・日光坊中	壬生通、水戸佐倉道等
奥州道中	宇都宮・白河	
甲府道中	江戸・下諏訪	

表1 江戸時代の五街道

宿場には、本陣や脇本陣、問屋場などが置かれました。本陣等は公家や大名の宿泊場所であり、問屋場は伝馬を維持管理する役所です。もちろん一般の旅人のために旅籠や木賃宿、茶店や商店などもでき、次第に街道として完成していきました。

(2) 名古屋市内の東海道

この東海道が名古屋に入るのは緑区の有松になります。有松から鳴海に入り、ここに宿場が置かれました。品川から数えて40番目の宿場です。鳴海を出ると、天白川を渡って笠寺観音の境内を抜けます。笠寺台地を通り、呼続から山崎川を渡って熱田へ向かい、そこに宿場が置かれました。そして、その熱田宿のはずれから桑名宿への七里の渡しへというルートをとっていました。明治21年の地図では、当時の幹線道路だけに、その跡が良く分かります。(図1)

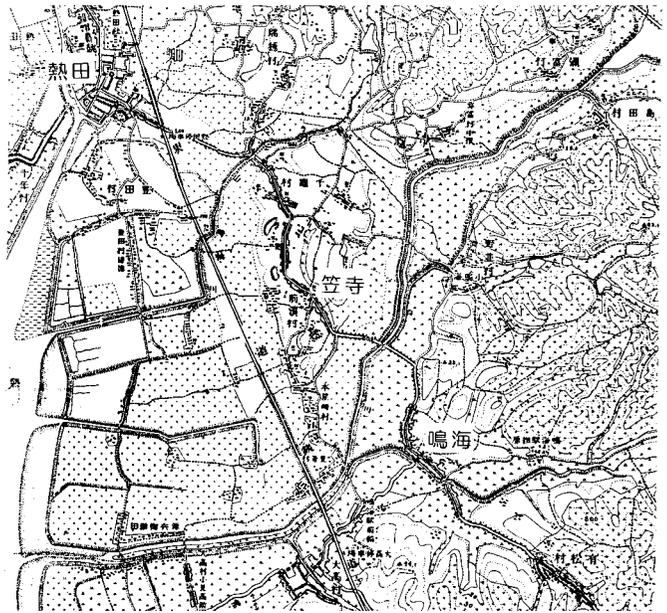


図1 明治21年の東海道(名古屋市内)

3 笠寺から七里の渡しをあるく

それでは、名古屋市内の東海道を少し歩いてみましょう。半日程度で歩ける区間として、笠寺観音から熱田宿・七里の渡しへと向かうことにします。名鉄本線の本笠寺の駅を降りて東に広い通りを渡るとすぐ笠寺観音の西門です。

笠寺観音は、正しくは天林山笠覆寺といい、尾張四観音の一つとして広く信仰を集めています。創建は736年頃。少し南の粕畑に十一面観

音を奉る寺が建立されたのに始まります。有名なのはその後の930年頃、荒廃し雨露にさらされていた本尊に、地元の心優しい娘が笠を覆ってあげたという故事です。娘は通りかかった関白の息子に見初められ、後に現在の地に笠覆寺として堂宇を建立しました。(図2)本尊は今も笠をかぶったお姿です。

笠寺観音の境内にはいろいろな史跡がありますが、今年は見落としてはいけないのが宮本武蔵の供養碑でしょう。巖流島の戦いの後、彼は数年尾張柳生のある名古屋の地に留まり、剣道指南をしたようです。碑は、その弟子の系統の人たちが武蔵の百年忌(1744年)に建立したものです。テレビドラマの影響からか、今年を訪れ



笠寺観音(今年は恵方だった)



図2 尾張名所図会(笠寺観音縁起)



宮本武蔵の碑



山崎城跡

る人も多いようです。

さて東海道は、その西門を西に戻り、環状線の信号を渡ります。商店街を抜け、名鉄本線を渡って信号を右に曲がり、これからしばらくは笠寺台地を進みます。この大地は、前回も触れましたが、昔海面が高かった時、島となっていたところで、「松巨島」ともよばれていました。この辺りは史跡も多く、街道から西に少し入ると、戸部城跡、富部神社、長楽寺などがあります。

しばらく行くと前回紹介した鎌倉街道と交差します。右には黄竜寺、地藏院が、左に少し入ると白豪寺があります。街道沿いには、宿駅制度制定400年を記念して、各所に石柱が立てられており、とても分かりやすくなりました。

笠寺台地を下り始めるところに、右手に熊野三社があり、その裏手を少し行くと名鉄の上を渡って山崎城跡の宝泉寺があります。笠寺台地は、戦国時代は今川と織田の勢力のぶつかる所で、台地上には十箇所近い城跡があります。台



山崎川を渡って八丁噺へ

地を下り、山崎川を渡ると街道は左に曲がります。

*

ここから熱田までは八丁噺といわれ、両側には家はなく松並木だけの寂しい道でした。道は、始めの内は旧道のイメージが残っていますが、信号を過ぎると徐々に広がり、幅50mの国道に合流します。その少し手前には、明治初年、東遷される明治天皇が秋の稲の収穫をご覧になった所があります。今は国道とビルの中ですが、当時はのどかな風景が広がっていたのでしょう。(瑞穂区の名の起こりもこれと関係がありそうです。)



明治元年、天皇が秋の収穫を

旧道は広い国道の中ですので、左側の歩道をたどります。国道が高架になって、道は側道となり東海道線を渡ります。旧道を忠実にたどるには、突き当たった新堀川を迂回して再び国道に出、名鉄のガードを過ぎて左に曲がり、すぐ右に曲がるルートでしょう。そこに、昔は精進川が流れており裁断橋がかかっていました。

今は、近代的に成った姥堂の前に、形ばかりの橋があり、江戸時代の始めに、息子を戦で亡くした母が子供を思う心を綴った、わが国女性文の3名作ともいわれる名文のある擬宝珠があります。

*



現在の裁断橋



熱田宿(伝馬町)

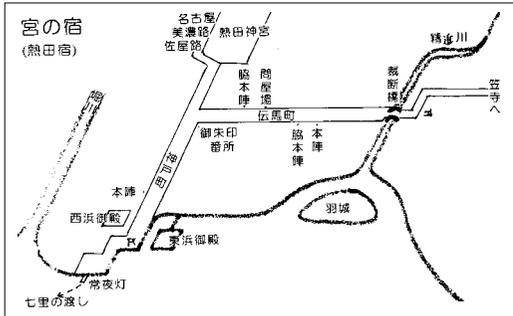


図3 熱田宿の概要

熱田宿は宮の宿ともいわれ、名古屋城下や街道の分岐点として東海道53次随一の規模を誇った宿場でした。赤本陣、白本陣2つの本陣や問屋場その他、御朱印番所や尾張藩の2つの御殿等も置かれていました。(図3)

道は宿場の跡(伝馬町)を現在の広い道路を迂回して進み、少し行くと突き当たります。ここは街道の分岐点で、右は城下や美濃路・佐屋路、正面には熱田神宮の森が見えます。

東海道は左に曲がり(神戸町)、ここでも広い

道を歩道橋で迂回して進みます。その先は、すぐ水辺です。昔は、この辺りから先は海でした。江戸時代の埋立てによって海岸は3~4*先になりましたが、この桑名への七里の渡し場の辺りは、今も堀川に突き出した公園として、常夜灯とともに当時の面影を残しています。

4 学び・歩き・感じる

半日かけて、古い東海道を歩いてきました。300年近く国土の幹線として多くの人に歩かれてきただけに、少しの紙幅では語り尽くせないような物語があります。

古道歩きで大切なものは、まず、歩くために学ぶことです。街道の成り立ちや沿道の史跡などを通して地域の歴史を知る事です。次に、そこを歩くことによって、歩いたという実感をつかむことです。むかしの人と同じように、自分の足で歩き体験することです。そして3つ目は、歩きつつ感じることです。昔のままのところもあれば、荒れ果てたところもあり、生まれ変わったところもあります。

この学・歩・感の3つが一体になったとき、古道歩きは物語としても、だんだんおもしろいものになっていくのではないのでしょうか。

街道に 春待つひとの 三、四人

〈参考文献〉

- ①児玉幸多編「日本交通史」(吉川弘文館 1992)
- ②森本繁「宮本武蔵を歩く」(学習研究社 2002)
- ③日下英之「熱田歴史散歩」(風媒社 1999)



常夜灯と七里の渡し場